

辰野 隆

忘れ得ぬ風 丰

忘れ得ぬ風ふう
豊ほう

浜尾新先生

毎週二回か三回、僕は帝大構内の、浜尾新先生の銅像の下を通って、丘の上の教員食堂に午飯を食べにゆくのだが、その銅像を眺める度毎に、在りし日の先生とは似てもつかぬ姿だと思わぬためしはない。率直に言えば、この銅像は浜尾先生ではないのだ。食えない狸たぬきじじい爺的総長が年度がわりの予算について思案しているようでもあり、総長の椅子も一時の腰掛としてはまんざらでもない、

と云ったような政治家的人相が、観る者を親しましめないのである。その昔、僕等が慈父の如く懐しがった故先生の特質がこの銅像には殆ど現われていない。

第一に、浜尾先生の顔はいつ見ても春風駘蕩たいとうで、その慈眼には子弟を愛する温情があふれるほど湛たえられていたのに、銅像の顔には、かすかな笑いの裡うちに、専制的な意志と皮肉な冷やかさが潜ひそんでいる。第二に、銅像のポーズが、未だ嘗かつて僕等が昔の先生に於いては一度も見たことのない、脚を組んで手で頬を支えた姿勢なのである。謹厳な先生にしても、その生涯に一度や二度はあんなポ

オズをされたこともあつたかも知れぬし、そうした姿の
写真もあるのかも知れぬが、少くも僕等は、あの銅像の
ようにバタ臭い先生の態度を一度も見たことがなかつ
た。どう考えても制作者は浜尾先生という仁ひとを知りもせ
ず、見もせず、その人格の香りに触れなかつたアルテイ
ストに相違ない。

尤も、今の帝大学生は既に先生の風采を知らず、在り
し日の面影をしのぶよすがもないから、あの銅像が本尊
に似なくても、何等の痛痒つうようを感じぬだろうが、少しでも、
先生の警咳けいがいに接し温容に親しんだ人々は、仁者を描いて

くとう
狗盗に類するあの銅像を、
すこぶ
頗る物足らなく思うことであらう。

全く、浜尾先生のような名総長は何処の学府でも再び得られぬかも知れない。先生はL・L・Dという立派な学位を持って居られたが、それが如何なる学問を意味するものか、僕は永い間知らなかった。学生時代に僕等の仲間の一人が、一体L・L・Dというのは何の学位だろうと云い出した時、誰も知らなかった。誰いうとなく、「恐らく総長学だろう」ということに一決したが、蓋しけだ帝国大学総長というタイトルと浜尾新という名前位ぴっ

たりと来る感じは滅多にあるものではない。

先生は尽忠じんちゆうの君子であつた。東大の陸上運動会や短艇競漕や剣道、柔道の大会の折には、いつも先生が天皇陛下の万歳を三唱して会を閉ずるのが吉例になつていた。而も万歳の声が先生の肚はらの底から発せられる時、僕等学生は厳かにして且つ朗かな気分になつて、心から先生の音頭に和して高らかに万歳を唱え、日本帝国の学生たる幸福を満喫したのである。

先生は罕まれに見る訥弁とつべんであつた。巧言令色には凡そ無縁まじりの仁者であつた。而も先生の演説の拙ますさ加減が世の常の

雄弁にもまして敬愛されていたのだから愈々いよいよ貴いかつた。嘗て青山胤通博士が先生の演説を聴きながら、会心の笑えみを漏らして、「あの拙さが何とも言えない——。」と三歎していたのを僕は小耳に挟んで、これある哉かなと思つた。幾度か聴いた浜尾先生の演説では「之を要するに」と云つて、実は何も要していなかつたり、「蓋し」が少しも蓋さなかつたりするのは珍しいことではなかつた。「諸君は……身体……健康……壮健にし……」などといふ珍妙な文句が聴衆を失笑させたことも度々であつた。而もそれがトンネルの中で法螺ほらの貝を鳴らすような音声

で語られると、真摯しんしな情熱と愛嬌あいきょうとが湧いて来るのであった。

先生は、また、話の長い人であった。当時の多くの教授のうちでも、浜尾先生から電話がかかると、先ず短くて三十分と定めて、電話室に椅子を持ち出す人が少なくなかったという。先生の話の長さには、実は僕も散々に悩まされた経験がある。多分明治四十二年の夏だったと思うが、伊豆戸田の帝大水泳部に、芝居好きな学生が集ったことがあった。そのなかでも、中野武二、谷口喬一、

今村信吉なんぞ一騎当千の劇通が、茶話会の余興に声色こわいろぐらいじや気分が出ないから一層大仕掛に水泳部主催で芝居興行をやらかそうじやねえか、ということになって、
忽たちまち相談がまとまり、外題げだいは一番目が千代萩床下の場、
二番目が源氏店げんじだなと決った。水泳部の学生さんが芝居をやるという噂が戸田村は云うに及ばず、近在の村々にも伝わった。愈々当日となつて、その景氣のすばらしさ、これは大変なことになつたぞ、と少し恐ろしくなるほどであつた。近村から岡づたいに、或は海を渡つて押寄せた観衆が六百人、氷屋やしるこ屋おでん屋まで店を張りだ

すという騒ぎになった。床下の場を無事に了って、愈々呼びものの「ゆすり場」となり、中野老鉄山の蝙蝠安こうもりやす、谷口喬一の与三郎、丹波五郎のお富、今村信吉の多左衛門という役割で、水泳部の食堂にぎっしりと詰った六百の観衆を唸うなりに唸らせたのであった。

ところが好事魔多し、芝居興行の噂がまわりまわって浜尾総長の耳に入ったのであった。九月の新学期になってから、誰いうとなく、水泳部の芝居騒ぎについては、総長は非常な立腹で、取締三人は退学、演技者一同は停

学になるといふ噂が僕等にも伝わって来た。取締三人とは医科の宮部昇、法科の霜山精一、それから斯かくいう僕なのだから——而も名は取締だが三人とも取りみだしと評判されていたので——お互にこの夏は少々取りみだしすぎたなあ、と寄り寄り話し合つては、びくびくしていた。唯一つの頼みは当時の運動部委員長丹波敬三博士の五男、五郎君がお富に扮して、妙技を揮ふるつたのであるから、万一取締や演技者が厳罰に処せられるようになったら、委員長はまさかに俺たちを見殺しにするようなこともあるまい。殊に丹波博士は狂言の名手でもあったか

ら、歌舞伎にも多少の同情はあつて然るべきだと、僕等はそんなことでも当てにして、自ら慰める他はなかつた。

九月の末であつた。水泳部取締三名、何日、午後一時、本部総長室に出頭すべしという達しがあつた。そら来たとは思つたが、僕等三人は「まさか退学にもなるめえ」と肩を聳^{そび}やかした。が、それでも、総長室へ往く歩みはのろかつた。三人は端然として大仏の如く構えている総長の面前に、卓を隔ててかしまつた。浜尾先生は徐^{おもむ}ろに口を切つて、取締ならびに演技者の学生の本分に悖^{もと}る行動を誡^{いまし}めて、苟^{いやしく}も帝国大学の学生が顔に粉黛^{ふんたい}を

ほどこして河原者の真似をするとは何事であるか。シエ
ークスピアやゲエテの傑作の中から学生の余興にふさわ
しい場面を択んで演ずるならまだしも、市井無頼しせいの徒の
いかがわしい風習行蔵こうぞうを描いた唾棄すべき演劇の真似な
どは言語道断である。深く反省して今後を慎しんでもら
わねばならぬ、というような意味であつた。僕等三人も
初めは唯々恐縮して、先生の顔を仰ぎ見もしなかつたが、
叱られているうちに、次第に呑気のんきな気持になつて来て、
時々先生の顔をちらりと眺めると、一向に声色を励ます
ところもなく、全まるでお爺さんが穩かに孫さとを訓さとすような態

度なので、三人とも「まずまず退校は免れたな」と思つて、漸く安らかな気持になつていった。それにしても、先生の訓戒の長いには三人とも、ほとほと閉口した。一時から三時まで、同じ言葉を繰り返し繰り返し、而も言葉と言葉の間が長く、もうお仕舞だろうと思つて、三人が尻をもぞもぞさせて立ち上ろうとするが、どうしても呼吸が合わない。すると、先生が再た同じ訓戒を始めからやりなおして「苟も学生が粉黛をほどこして……」と来るので、三人は新たに顔を見合せては、仕方なしに腰を落ちつけてしまふのだった。

とうとう、二時間あまり訓されづめに訓されてから、三人は芽出度く放免された。総長室を逃れ出ると、三人は申合せたように大欠伸おおあくびをしながら、「長げえ小言だなあ！」と大笑いをしたのであった。斯くて、取締と演技者一同は兎に角、退学や停学の処分を免れたことを互に祝福し合ったのである。

浜尾先生の在任中、嘗て陸軍当局が一年志願兵制廃止の意向を帝大へ通告したことがあった。先生は、たちどころに、国家の学問という見地から断乎として反対した

のであった。学生の修業期が中断されるのを国家の由々しき損失だと信じた先生は、自ら陸軍省に赴おもむいて、当局を相手に、例の大仏のような態度で、志願兵制廃止の非なる所以ゆえんを切言した。若もし陸軍当局にして、飽くまで国家の学制を覆すような意向を固持するなら、帝国大学でも今後一切陸軍の依託学生の修学を拒絶する他はない、と力説して、軍部が主張を翻えすまでは、いつ迄も席を立とうとしなかつたそうである。先生の説くところは極めて平明で疑いを容れる余地もなく、加しかのみならず之、同じ言説を、幾度となく繰り返されるので、流石さすがの陸軍当

局も、先生の欺あざむかざる熱意と根氣と、終りなき訥弁に、とうとうしびれを切らして、帝大の主旨を諒とするに至ったのだそうである。而も堂々と所信を披瀝して憚はばからなかつた浜尾総長が軍部の怒りも恨みも買わず、軍部は軍部で帝大総長の人格と信念とを容れて、光風霽月せいげつの襟きん度どを示した点は、当時、学府と軍部とがその思う所を忌憚きたんなく語り合つて、俱ともに進まんとする美挙として、心ある者に深い感銘を与えたのであつた。

浜尾先生は篤学の士を熱愛した。また先生の同僚や後

輩の子弟にして帝大に遊ぶ者も少くなかったので、そういう学生には二代目に対する一種の感情を以て接して居られたように思われた。我等の総長として在任中、僕は帝大の構内を楽しそうに散歩する先生に屢々しばしば会したことがあった。恭うやうやしく帽を脱いでお辞儀をすると、先生は必ず、「勉強をして居るかね」と訊ねる。それから、「お父さんはお達者かね」と来る。これが何時も判で捺おしたように易かわらぬ挨拶であった。「勉強をして居るかね」と言われても、当時一向勉強をいたして居りません僕には、この言葉がいつも痛く響いた。いつも「はッ！」と答え

て、こそこそと逃げ出したものである。

僕の記憶に誤りがなければ、片山国幸博士が未だ医科の学生であつた頃、或る朝、登校の際、本郷三丁目の辺で、後から、「片山君」と呼ぶ太い声に驚かされた。振り返つて見ると、それが浜尾先生だったので、悪い人につかまつたとは思つたが、逃げるわけにもゆかず、二人の巨漢は肩をならべて歩き出した。然るに先生は一言も口を利かない。片山氏も口を利かない。二人は啞ずいずいの如く——先生は悠々と黙しながら、片山氏は惴々ずいずい焉として黙しながら——兎に角赤門まで辿り着いた。赤門をはいる

と、先生は左に折れて本部の方へ、片山氏はまっ直ぐに医科の教室の方へ足を向けることになった。片山氏が脱帽して別れようとした時、三丁目以来黙しつづけた先生は氏を顧みて、「お父さんはお達者かね」と第二の言葉を発したそうである。話と話との間の長いこと、蓋し先生の如きは罕であろう。

復讐の女神ネメジスは人間の幸福を妬んで、之を傷けねばやまぬという。浜尾先生が不慮の火傷のために、僕等が祈念していた寿よわいに先立って、亡くなられたのは如

何にも残念であった。先生の如き人格者は、何をされずとも、唯生きて居られるだけで、僕等後身は何か清いもの、温かいものを感じて、寂寥たる人生の一角に春風の訪れるのを知ったのに、ネメジスは学会の大先輩を無理に奪い去ったのであった。

三宅雪嶺先生

晩年の浜尾先生の円満具足の容貌を忘れかねた僕は、

もう二度とああいう立派な顔には会えぬものと諦めていた。然るに、昨年十二月の末、偶々、たまたま三宅雪嶺先生のお宅に招かれて、実に、十六年ぶりで、先生の風丰ふうぼうに接したのであった。久しぶりで眺めた先生の温顔は晩年の浜尾先生に勝るとも劣らぬほど床しかった。現代にも未だ斯くの如き高潔にして穏雅な顔が残っていたのかと、窃ひそかに三歎せずにはいられなかった。

三宅先生は赤坂新坂町に永い間住んで居られた。僕も亦同じ町に永い間住んでいた。新坂附近は静かな屋敷街

で、散歩には極めて適当な区域であつたから、散歩に興味を持って居られるらしい先生が、帽子もかぶらず着流しの村夫子然たる姿で、肩を上下左右に揺りながら、散歩にしては稍々速い足歩で歩いて居られる姿を屢々見かけた。概ね一人であつたが、時に花圃夫人とお揃いのこともあつた。そういう時に、僕は「人間の夫婦もこのくらい色気ぬきの、さばさばした睦じさに結晶すれば、全く大したものだ。」とつくづく感心したのである。その後十幾年、先生御夫婦の仲らいは、愈々浄化されて、殆ど伝説的な翁媪おうおうに近づいたかの感がある。

僕が「日本及日本人」を毎月購読するようになったのは、一高の二年生時分からであつたと思う。僕はこの雑誌にいつも載つた先生の独得の風格ある論文と、古島一雄氏の『雲間寸観』を欠かさずに読んだ。中学の五年間は勿論、一高に入学してからも唯スポーツだけが面白く、書物などは見向きもしなかつた僕は、一年生の終り頃から、三年生魚住影雄の個人主義顕揚の華々しい論文や、同級生でもあり且又当時の一高に於ける唯一人のソシアリスト横田兵馬の秀才ぶりにしたたか刺激されて、俄にわかに書物を読み始めたのである。平民新聞の愛読者になつ

たり、クロポトキンの『自叙伝』や『パンの掠取』やトウルゲニエフの小説の仏蘭西訳を辞書と首っぴきで読み耽って、未だ嘗て知らざる世界に、ネオフィットの熱意を込めて入って行った。

三宅先生の『宇宙』を読んだのも恐らくその頃であつたろう。今では、『宇宙』は青柳有美氏の解説を附して新たに刊行されているが、その青柳氏の『有美臭』という文集をも読んで、その中に、「願くは我に緑雨の文を与へよ……」という文句があつたのを今に忘れない。当年の僕も亦緑雨の『あま蛙』、『みだれ箱』、『あられ酒』、『わ

すれ貝』などを好んで読むようになっていたからである。

黒岩涙香の『天人論』は三宅先生の『宇宙』よりも先に出版されていたのだろうが、僕は『宇宙』も『天人論』も、兆民の『一年有半』も、樗牛全集も梁川文集も露伴叢書も紅葉全集も水泡集も漾虚集も藤村詩集も有明集も、殆ど同じ頃に、手当り次第に読み漁った。斯ういう乱読癖、雑読癖が高等学校時代から今日まで続いているのである。恐らく死ぬまで続くことだろう。怠け者の趣味としては、これが時を殺す最良の手段に相違ない。

きゆうろう

旧臘、雪嶺先生のお宅に招かれた夜、僕は久しぶりで花圃夫人にもお目にかかって、新坂町時代の昔話に懐しさを覚えた。その夜、夫人の目がひどく充血して、頗る視力が衰えているように見うけた。「これでも、大分見えるようになりましたが、先頃は殆ど見えないほど悪うございました。でも夫は滅多に妾うちの顔わたくしなんか見たことがない人なので、妾の目が充血していることなんか全で気がつかなかったんですって、呑気でしょう。」と夫人は笑って居られた。

然し、夫人の顔を滅多に見たことのないような仙味に

充ちた先生も、先年、嫡嗣ちやくしと長女中野正剛夫人を失われ
 てからは、折々愛児愛嬢のいまそかりし昔を思い出され
 るらしく、或る日、食事中、遽にわかに箸を投じて涕泣され
 たと仄聞そくぶんした。ここにも亦ネメジスの殃わざわいが潜んでいた
 のかと深く歎かざるを得ない。

その夜、三宅邸に集った人々は、高島、若宮、荒畑、
 白柳、野依の諸氏の他数名、何れも、一癖も二癖もある
 論客、記者揃いで、洵まことに踔厲風発たくれいふうはつであつた。その間に
 あつて、先生は終始にこにこととして、猛者連の談論を如

何にも楽しそうに聴きながら、相槌を打たれたり、時々とぎれとぎれに談じて居られた。僕はそうした先生の顔を眺めて、凡そ達人とは斯くの如き仁を指す語ではなからうかと思つた。而して、はしなくも、チエルシイの賢、コンコルドの哲、初台の……何と云つたらいいか、仙と云うか、聖と云うか、いやいや、矢張り、英語のセイジ、仏蘭西語のサアジユを日本式にした語があればそれが最もいいのだが、と考へていた。

さて、僕は何十年來、先生の文章には親しんで來たのだが、先生の談を聴いたのはその夜が初めてであつた。

而も先生の話というのが、これが又浜尾先生にしんにゆう 疋ををかけた訥弁で、よほど耳をそぼだ敬てて聴いていないと、充分に意味が聴き取れないのである。少し込み入った事務の話になると、先生の日本語を花圃夫人が更に邦訳されるのだそうだが、その夜は漫談閑語に終始したから、夫人は敢えて通訳の労をとられず、初めて聴く僕の耳には、先生の大和言葉が希臘語ギリシアよりも難解であった。

それにしても、近来まれ罕な、楽しいソワレであった。荒畑寒村氏に会ったのも殆ど二十年ぶりであったろう。数

年前、或る危機に於いて、氏が半世の苦楽を共にする夫人に宛てた書簡を、涙を以て読んだ記憶が新たに甦つて来たのみならず、竹を割ったような安成貞雄君が嘗て、凡そその心情と思想と経歴に於いて、荒畑ほど純粹なレヴオリユシヨネルは未だ見たことがない、と沁々僕に語った言葉をも思い出したので、懐しさもひとしおであった。加之、野依氏の顔を見たのも、その夜が二度目であった。野依氏の方では初めてであろうが、僕には忘れられぬ思出がある。恐らく、大正二年の春であったろう。当時、法科の四回生であった僕は、刑事訴訟法担当の豊

島博士に率いられて巢鴨の監獄を見学したことがあった。その時、監獄の中庭で、円い顔をした短軀の囚人が唯一人、元気よく「お一、二、お一、二、」と言いながら、駆け足をやっていた。

「あれが野依秀市だぜ。あの駆け足が野依の俺達に対する示威運動なんだ。」

と学生の一人が僕等に教えて呉れたのであった。その後幾春秋。当夜の野依氏の顔は相変わらず円く、その身丈は相変わらず短く、而して相変わらず潑刺として元気に充ちていた。

その夜、おそ晩く雪嶺先生の邸を辞してからも、僕は久しぶりで、真に久しぶりで、会った人々の顔を思い出しては楽しい感慨を禁じ得なかった。殊に先生のしやくしやく綽々として天命を楽しむ温容と、天下一品の吃々たる日本語を反はん芻すうしながら、僕は自ら会心の微笑を、誰に分つのをも惜しみつつ、独りで味ったのであった。

(昭和十二年十二月)

日本文学電子図書館

忘れ得ぬ風

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館